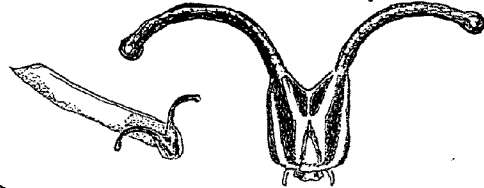
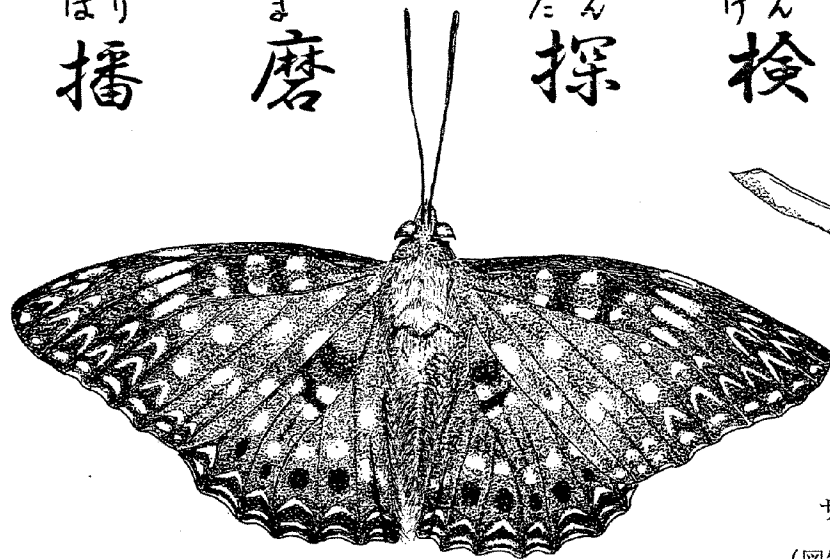


はり ま たん けん
播 磨 探 検

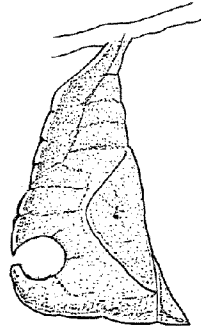
2019. 8. 25

288号

ふん 赤松 弘一



終齢幼虫の頭部 (図鑑より)



サナギ
(図鑑より)

スミナガシ (タテハチョウ科) 前翅長 32~44mm
墨流 *Dichorragia nesimachus* 食草 アワブキ

昨年が続いてこの夏の暑さも記録的であった。人類が引き返せない次元にまで地球の温暖化を進めてしまったことは、もはや疑いようもない。「このままでは自分が気の毒なので、高原に行って涼もう」ということで8月11日、神河町の砥峰高原に出かけた。かれこれ50回以上は訪れているが、どんな暑い夏でもここは涼しかったのだ。しかしこの日は高原までが暑かった。数年前から斜面の森を拓いてスキー場が整備され、今もそのための道路が工事中であった。「この美しいススキの高原もどうなるかわからないな」と自然の改変を嘆く私も、二酸化炭素を豪快に吐き出しながら車でやって来たのである。高原でおにぎりを食べ、「信州上高地は涼しかった」と呟きながら帰途についた。

途中で長谷ダム近くの水汲み場に立ち寄ったが、この水は昔と変わらず冷たくてうまかった。その時山道にとまっているチョウを見つけた。翅を閉じたり広げたりしながら地表の水を吸っているようだった。地味な深緑の翅の色には記憶がある。スミナガシだ。

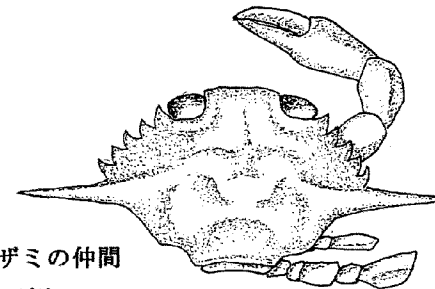
20年ほど前に千草高原の水汲み場で出会ったことがあるが、いつかまた出会ったら絵を描いてみようと思っていたのだった。捕獲するには網もなく、標本にはしたくない(お盆だからというのではなく、殺生は好まない)ので、写真を何枚も撮った。30cmぐらい近寄っても動かないので、安物のカメラでもいい写真が撮れた。「いいよお、スミナガシちゃん」近付いて見ると光の当たり方によって、後翅が深い緑色からモルフォチョウのような青緑色に輝いた。図鑑では知り得なかったことで、その美しさに暫し見とれながら思った。「こいつを描くのは難しいな」(実際、描くのに3日間で延12時間かかった。)

スミナガシはサナギで越冬して春に成虫が羽化する。そして産んだ卵が成長し夏にまた成虫が羽化する年2回発生型である。今回出会ったのはこの夏型の成虫だろう。やがて産卵して死ぬが、その幼虫がサナギとなって越冬し来年の春にまた羽化する。

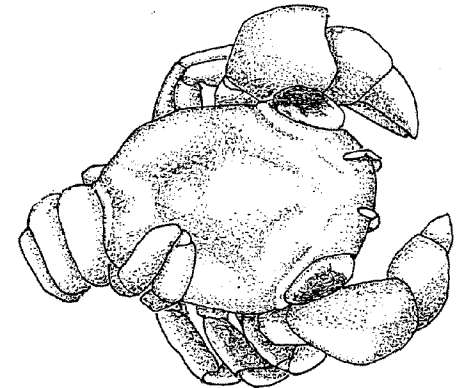
スミナガシの幼虫やサナギは非常に面白い特徴的な姿をしている。終令幼虫の頭部にはカールした長い角(ツノ)がある、ゴマダラチョウの幼虫にもツノはあるが、こいつのツノはおそろしく長い。サナギは枝についた枯葉にそっくりで虫食いの穴まで擬態している。まだ見たことはないが、神の悪戯としか思えないこのサナギをいつか見てみたい。

黙って食うな、よく見ろ II

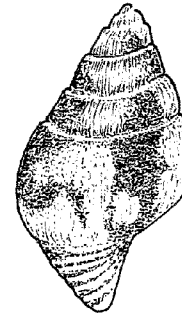
~海の命を支える小さき者たち~



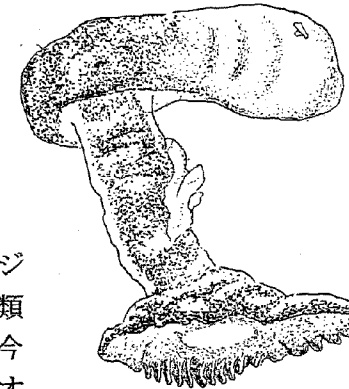
ガザミの仲間
甲幅 6mm



オウギガニのメガロパ幼生 体長 4mm



巻貝の幼生
殻高 3mm



謎の無脊椎動物
高さ 5mm

久しぶりにチリメンモンスター(チリメンジャコに含まれる様々な稚魚やタコ、イカ、甲殻類の幼生などの混獲物の俗称)の観察を行った。今回は希少なタツノオトシゴの他、甲殻類ではオウギガニの仲間らしきメガロパ幼生やガザミらしき小さなカニ、シャコ、ウオノエ(魚の口内などに寄生する甲殻類)の幼生が見つかった。他にはバイガイに似た稚貝、キノコのような形の謎の生物がいた。こいつの内部は腸管のような管状になっているが口や排泄口がない。何かに固着して生活していたようだが、カイメンやホヤ、イソギンチャクなどの幼生だろうか? チリメンジャコはこれらの混獲物を風圧で飛ばしたり、人の手作業で丹念に取り除いたりして出荷されるのだ。取り除いた混獲物も元は命ある生き物だから、養殖魚のエサや家畜の餌、ペットフードなどに無駄なく活用すればいいと思う。

近年サンマやスルメイカが不漁だが、果たして乱獲だけが原因なのだろうか。海の中の生態系に何か大きな変化が起こっているのかもしれない。ちりめんモンスターたちはそのほとんどが他の魚などのエサとなり食べられてしまうが、海の世界連鎖の根底を担う重要な存在である。これら漂う小さな生き物が減少すれば、大型の魚も生きてはいけぬのだ。

探索を続けると緑色の小さな粒が見つかった。顕微鏡で見ると摩耗したプラスチックの碎片のようだった。有害物質を吸着しているというマイクロプラスチックだろうか。

マイクロプラスチックによる汚染は世界的な問題になっている。自然の循環から外れたプラスチックが環境を汚すことはずっと以前からわかっていたはずである。大雨の後の加古川では、おびただしい量のペットボトルや発泡スチロールが海へ流れ込んでいくのが見られる。海岸にはナイロンやプラスチック樹脂のゴミが多量に打ち上げられる。生産されたプラスチック製品は使用後ゴミとして捨てられるが、何割がきちんと処理されているのだろう。これまで無制限に享受してきた便利な生活の負債は、結局我々が返さなければならぬのだ。「人類はん 今にみんな干乾しになって、往生しまっせ」(泉州沖のちりめんより)